形相で上野さんの肘と膝のあたりの道衣を握りフライパン返しで一気に引っ繰り返した。あっという間に崩れ袈裟固めで抑え込んだ。目の前の情景が信じられなかった。どうして上野さんまで——体力も技術も違いすぎる——どうなっているんだ——。

「上野！　動け！　逃げろ！」

北大陣営から大声が何度も飛ぶ。だが、上野さんが動くたびにがっちりと崩れ袈裟は決まっていく。

「上野！　頼むから逃げてくれ！　これで四年間が終わっていいのか！」

四年目の先輩たちが何度も叫ぶ。しかし三十秒はすぐに経った。主審が一本を宣した。ここで実質的な北大の負けは決まった。後藤さんのカメの練習一万本、上野さんのカメの練習一万本、合計二万本の膨大な練習量が超弩級選手によってわずか数分間で粉砕された。無に帰した。

阪大陣営は立ち上がって大騒ぎとなった。北大陣営は全員がうなだれていた。またこのパターンで負けるのか……この一年間の苦しい練習はいったい何だったのか……。

本間さんが畳に上がっていく。大将戦なので両陣営が正座した。ギプスをしている私は片脚だけを折った。

試合開始とともに本間さんが松本に躍りかかった。寝技にいっても前の二人のように抑え込まれるのは目に見えていた。上野さんのカメまで攻略されたのだ。立技の一発に賭けるしかなかった。しかし立っていっても結果は見えていた。

松本の内股の巨砲が本間さんを浮かせた。本間さんは腰を引き、松本の足を取りにいく。松本がそれを引きずるようにして前に崩すと、本間さんは顔面から不格好に畳に落ちた。すぐになり

ふり構わず松本の脚にしがみついたが、松本がそれを強引に引きずり上げてまた内股を放った。本間さんが大きく宙を舞って背中から畳に落ちた。主審が「一本！」と宣した。松本が立ち上がり、阪大陣営に向けて大きくガッツポーズしながら開始線へ走った。阪大勢はそれに「よっしゃー！」と応じた。

北大の十五人と阪大の十五人が畳に上がり、最後の礼をした。北大勢は憔悴して自陣に戻ってきた。

隣の会場ではすでに絶対王者京大が東大を二人残しで破っていた。北大の敗者復活の相手は阪大より力が上だと思われる東大となった。

「もっと自覚持ちんさい！」

大声が聞こえた。見ると、和泉さんの前で後藤さんがうなだれていた。たったひとりの三年目のレギュラーだった。

4

北大の一年目が敗者復活戦のオーダー表を持って走っていった。

向こう側で円陣を組んだ東大勢が「おう！」と気勢を上げている。みなぎる自信が彼らの背中から立ち昇っていた。とにかく人数が多い。数年前から寝技中心の七帝柔道のルールに異議を唱え、強豪大学や強豪実業団への出稽古を繰り返して、その強力な立技に磨きをかけている。昨年よりさらに強く見えた。

年刊部誌『赤門柔道』と『京大柔道』を並べて読むと、戦前から学問その他あらゆる面で宿命

のライバルである京大が寝技で七帝連覇を続けることを反逆のエネルギーにしているのがよくわかった。

係によってオーダーが順に掲示板に掲げられていく。

	北海道大	東京大
先鋒	沢田征次2	倉木豊史2
次鋒	後藤孝宏3	藤井　誠4
三鋒	末岡拓地4	相原博文4
四鋒	東英次郎1	窪田克彦1
五鋒	内海正巳4	佐田政隆6
六鋒	松井　隆2	阿部圭太2
七鋒	岡田信夫5	松本峰男4
中堅	荻野　勇2	道崎　隆3
七将	守村敏史1	浅野　桂4
六将	松浦英幸4	石森義則2
五将	和泉唯信4	紫藤英文3
四将	工藤飛雄馬2	福永憲高4
三将	上野哲生4	佐藤隆之3
副将	豊沢義弘4	福永誠一4
大将	本間龍也4	森崎雅文4
	（学年）	（学年）

前試合で負傷した竜澤が浜田俊政さんの病院から急ぎ戻ってきたが肋骨が折れていることがわかり、損傷がひどく、骨折部位も危険な場所なので出場は無理となった。代わりは海城高校で立技を身に付けてきた一年目の守村敏史、ここは大きな穴になる。

北大は、一回戦と同じように、末岡さん、岡田さん、松浦さんら抜き役を全体にちりばめ、本間さんを置き大将としてこれを残して勝ちにいく布陣。先鋒も阪大戦と同じく沢田征次だ。

対する東大は立技の二枚看板、道崎を中堅に、紫藤を五将に置き、二年生でやはり立技の切れる倉木を先鋒に、阿部を六鋒に据えている。次鋒には東京都国立大学個人戦をすべて絞め技の一本勝ちで優勝した寝技師の藤井を、そして東大がまだ寝技中心だった頃の生き残り医学部六年のベテラン寝技師佐田政隆を五鋒に置き、副将に灘高柔道部出身の主将福永誠一を据えていた。阪大に敗れた北大がこの強力なチームを破れるのか――。

主審に促されて両校の十五人のメンバーが畳に上がった。向かい合うと、やはり東大の方が体が大きい。並んでの立礼の後、いったん全員が自陣に戻って、先鋒の沢田が畳に上がっていった。対する倉木は口髭をたくわえた九〇キロの偉丈夫、開成高校柔道部出身で力強い立技を持つと研究時に聞かされていた。

「北大は立技できねえぞ！　ぶち投げろ！」

東大から声が上がった。

「なめやがって……」
北大OBが言った。
私は舌打ちして「沢田君、逆に投げてやれ！」と叫んだ。頼む――。
両者、気合いの声を上げて組み合った。しばらく激しい立技の攻防が続く。互いに襟をつかみ、それを切り合っては、足払いや小内刈りからの背負い投げを狙う。だが、試合が後半に入ると沢田が息を荒らげだした。
倉木が背負い投げ。沢田がこらえた。倉木はそれを強引に担ぎ続ける。沢田の両脚が宙に浮いた。「こらえろ！」と北大陣営から声が上がった瞬間、沢田が空中に舞った。畳に落ちる瞬間、沢田が体をひねって横転。主審が「技あり」のコール。だが七帝ルールは一本勝ちのみだ、技ありだけでは勝敗に関係ない。沢田はすぐにカメになった。倉木がバックにまわって腰を極め、絞めを狙いながら回転縦四方にいく。沢田は顔を歪めて逃げようとしていたが、すでに体力を使い果たしており、抑え込まれてしまった。
「なにやってんだ、沢田は……」
横に立つ四年目の先輩が言った。万全な沢田ならありえない展開だった。練習不足は明らかだった。一本を宣せられて陣営に戻ってくる沢田の息は完全に上がっていた。そして誰とも言葉を交わさず会場の隅に座り込んだ。
次鋒の後藤さんが畳に上がっていった。
蒼白になって倉木に挑んでいく。後藤さんは練習で沢田にまったく敵わない。まともにやれば倉木に対せるわけがなかった。すぐに寝技に引き込んだ。倉木は引きずり上げて立技に持ってい

こうとするが後藤さんが倉木のズボンをつかんでそれをさせない。倉木はしかたなく寝技で上から攻めはじめた。すぐに後藤さんがカメになった。そして沢田と同じように腰を極められ、両頬から手をねじ込まれて絞めを狙われる。後藤さんがそのままの姿勢で「ウォー！」と大声を上げた。まわりから失笑が起きた。
横に座る宮澤が堪りかねたように「後藤さん、ファイトです！」と声を上げた。私も「後藤さん！」と叫んだ。一年目たちも「後藤さん！」と叫びだした。後藤さんは何度も「ウォー！」と唸り声を上げ、まわりの失笑を受けながら、しかしそれでも最後までその体勢で守りきった。
足をふらつかせ蒼白のまま戻ってくる後藤さんを和泉さんが立ち上がって握手で迎え、肯きながら背中を叩いた。
次の末岡さんの相手、東大の藤井は一八三センチ八〇キロ、長身の寝技の抜き役だった。だが、末岡さんは自分から寝技に引き込んで下から攻めに攻める。
「末岡！　取れるぞ！」
松浦さんが声を上げた。四年目の先輩たちは、ここまできてもなお東大に勝とうとしていた。試合中盤、末岡さんが横帯を取ってついに下から返し、崩上四方固めで抑え込んだ。主審が「抑え込み」のコールをすると北大は総立ちになって声援を送った。私も宮澤の手を借りて立ち上がった。しばらくすると主審が試合を止めた。藤井は落ちていた。抑え込みながら絞めていたのだ。
「末岡さん、やっぱり強いなあ」
宮澤が言った。
見惚れるような寝技だった。白帯から始めたが、その攻撃力は抜群だった。絞めの名手、藤井

を絞め落としたのだ。末岡さんは二人目の相原に対しては無理せずにカメで引き分け、ここでタイに戻した。

四鋒は一年生同士の対戦となった。東も立技が切れるが、層の厚い東大でレギュラーに抜擢された相手の窪田もかなり切れた。両者激しい立技の応酬のまま引き分けに終わった。

東大はいよいよ六年の佐田が出てくる。

内海さんが慎重に引き込むと、寝技師佐田は待ってましたとそのまま上から攻めてくる。内海さんは脚を利かせてこれを守る。途中、巧く佐田のバックについた。

「よし！　そのままだ！」

北大OBから声が上がった。背中についたまま時間いっぱい粘って引き分けに持ち込めということだ。しかし、佐田は中腰になって内海さんを前に落とし、すぐに自分から下になり、脚を内海さんに向け、正対となった。ともに粘っこく脚を利かせる寝技は見応え充分だ。

「内海！　慎重にいきんさい！」

和泉さんが声を上げた。ここは引き分けて道崎や紫藤に対したい。だが、残り一分を切ったころ、佐田が見たことがない変則的な返しで内海さんと上下を入れ替えた。そのときにはすでに内海さんの脇は差されていた。すぐに首も固められそのまま横四方固めで抑え込まれた。

「内海！　最後の試合だぞ！　逃げろ！」

四年目の先輩たちが叫び続ける。

内海さんは必死に暴れるが、佐田が右に左に腰を切ってコントロールし続け、三十秒のブザーが鳴った。北大陣営から溜息が漏れた。

「佐田さん、もう一人お願いします！」

東大から声が上がった。

北大は二年目の松井隆だ。荷が重すぎる。松井は寝技に引き込んで下から佐田のズボンを握って守りに入った。しばらくそのまま息を整えていた佐田が松井を引きずり上げるようにして立ち上がり、松井の後ろ帯を持って大内刈りで松井を後ろに押し倒し、ひらりと身を翻して崩上に抑えた。これで二人差をつけられた――。

次の岡田さんは金澤さんと斉藤トラさんと言葉を交わしながら出番を待っていた。一本負けを宣せられ、うなだれて戻ってくる松井の肩を叩いて開始線まで肩を揺すって歩いていく。

岡田さんがここで最低でも一人抜き返さないと間違いなく北大の負けが決まる。東大にはまだ後半に抜き役がずらりと並んでいるが、北大の抜き役は岡田さんと松浦さんの二枚しか残っていない。二人抜きして汗にまみれた佐田は息を荒らげながら道衣を直し、帯を結び直している。

試合が始まると佐田は引き込まずに立ったまま休む。岡田さんが内股、大外刈りと猛然と攻める。しかしさすが歴戦の勇者、佐田は岡田さんのズボンを持ち、ときに片膝を着きながらこれを防ぎ、消耗した自身のスタミナの回復を待っている。岡田さんが押し込むようにして寝技に持ち込むと佐田はすかさずカメになった。岡田さんが必死の形相で横三角で返しにいく。佐田はこれをこらえていたが、何度目かでついに返った。しかし岡田さんが腕を縛ろうとしているところで逃げ、佐田は自分から下になって脚を向け、正対した。岡田さんが上から攻める。

「岡田さん、お願いします！　取ってください！」

北大陣営から大声が上がり続ける。岡田さんが上から佐田の左脚を越えにいった。そこを佐田

が浅野返しで返し、上下が逆転した。そのまま二人とも攻防のかぎりを尽くしたが、時間切れとなった。

三人と戦った佐田は顔面蒼白になりながら開始線で道衣を直す。一方の岡田さんはうなだれ、両膝に手を着いてそれを待っている。

「引き分け！」

主審が宣した。東大陣営が大騒ぎで佐田を迎える。

一方の岡田さんは息を荒らげながら戻ってきて「すまん」と言い、金澤さんと斉藤トラさんの前に座り、一年目から渡されたスポーツドリンクを音をたてて飲んだ。

私の隣に座る宮澤が言葉にならない大きな溜息を漏らした。私も含め、北大勢はみんな黙ったままだった。このまま、また最下位が決まるのか……。

次の二年目の荻野は寝技に引き込んで同じ二年の阿部の上からの速攻を防ぎ続けて引き分けたが、チーム最大の穴である一年目の守村が東大の四年松本に横三角から抑え込まれて三人のリードを許してしまった。松浦さんが必死に取り返しにいくが、徹底して防御にまわる松本に引き分けられた。

もう全員が取りにいくしかなかった。

東大の立技の二枚看板の一人、道崎には和泉さんが寝技に持ち込もうと執拗に誘うが応じてこない。和泉さんが主将の意地を見せようと必死に寝技にいこうとする。道崎がそれを嫌って立つ。その繰り返しのうち試合が嚙み合わず引き分けに終わった。

工藤飛雄馬の相手は四年の抜き役浅野だったが、それでもチームが勝つためには取りにいくしかない。

「北大は立技できないぞ！　投げろ！」

東大から声が上がった。飛雄馬は投技を狙う浅野を怖れ、腰を引き、へたり込むように寝技に引き込んだ。まわりから失笑が起きた。さらに途中から寝技に応じてきた浅野に飛雄馬は翻弄され、何度も腕挫ぎ十字固めに入られる。二年目の寝技ではやはり四年生相手には通じない。飛雄馬は肘の痛みに顔を歪めながら参ったせず、それを耐え続け、なんとか引き分けた。

続く上野さんは寝技に引き込んで下から返しを狙うが、相手石森はまったく応じてこない。

「いけ！　寝技でも取られないぞ！」

東大陣営からまた棘のある声が飛んだ。

明らかにチーム力に差がある。勢いも違った。

「みじめだね……」

隣の宮澤が言った。

私は黙っていた。

どう答えていいのかわからなかった。

上野さんが引き分け、豊沢さんが畳に上がる。

相手は立技と上からの寝技で圧倒的な力を持つ巨漢、超弩級の紫藤だ。豊沢さんの何度目かの引き込み際に合わせ、一気に崩上に抑え込んだ。もう見ていられなかった。

大将の本間さんが最後の砦として紫藤に向かうが、引き込み際をさばかれて簡単に横四方に抑え込まれた。何もさせてもらえなかった。この差は埋めようがない……。五人残しの圧倒的な差

で北大の四年連続最下位が決まった。
取られた六人はすべて寝技で敗れていた。立技重視の東大に、寝技ばかり練習してきた北大が寝技で取られたのだ。言い訳のしようがなかった。七帝の頂点の高さがどこにあるのか、北大にはその尻尾すら見えなかった。

5

夜の慰労会には旧交会東北支部のOBがみんな来てくれた。人数は五、六人と少ないが仙台在住のOBは結束が固かった。昨年の京都での七帝戦には二人しか先輩が来てくれなかったのだ。浜田浩正さん、佐々木紀さん、金澤さん、斉藤トラさんの他、試合のときは見かけなかった上田さんや永田さんも来てくれた。OBたちがこれだけ来てくれたことだけが救いだった。
四年目の引退挨拶となった。
和泉さんが立ち上がった。
監督や同期への感謝を述べたあと「来年こそ……」と言って天を仰いだ。
そのまま黙って涙を流しはじめた。
天を仰ぎ、涙を拭おうともせず、静かに立っていた。
静かに静かに、涙を流し続けた。
横で見ていた松浦さんがいたたまれなくなったように立ち上がり、和泉さんの肩を抱いて座らせた。だが、挨拶しながら松浦さんも感極まって涙をこぼしはじめた。末岡さん、本間さん、上野さん、豊沢さん、内海さんと順に幹部が挨拶していった。みな咽び泣きだした。私たちもただ

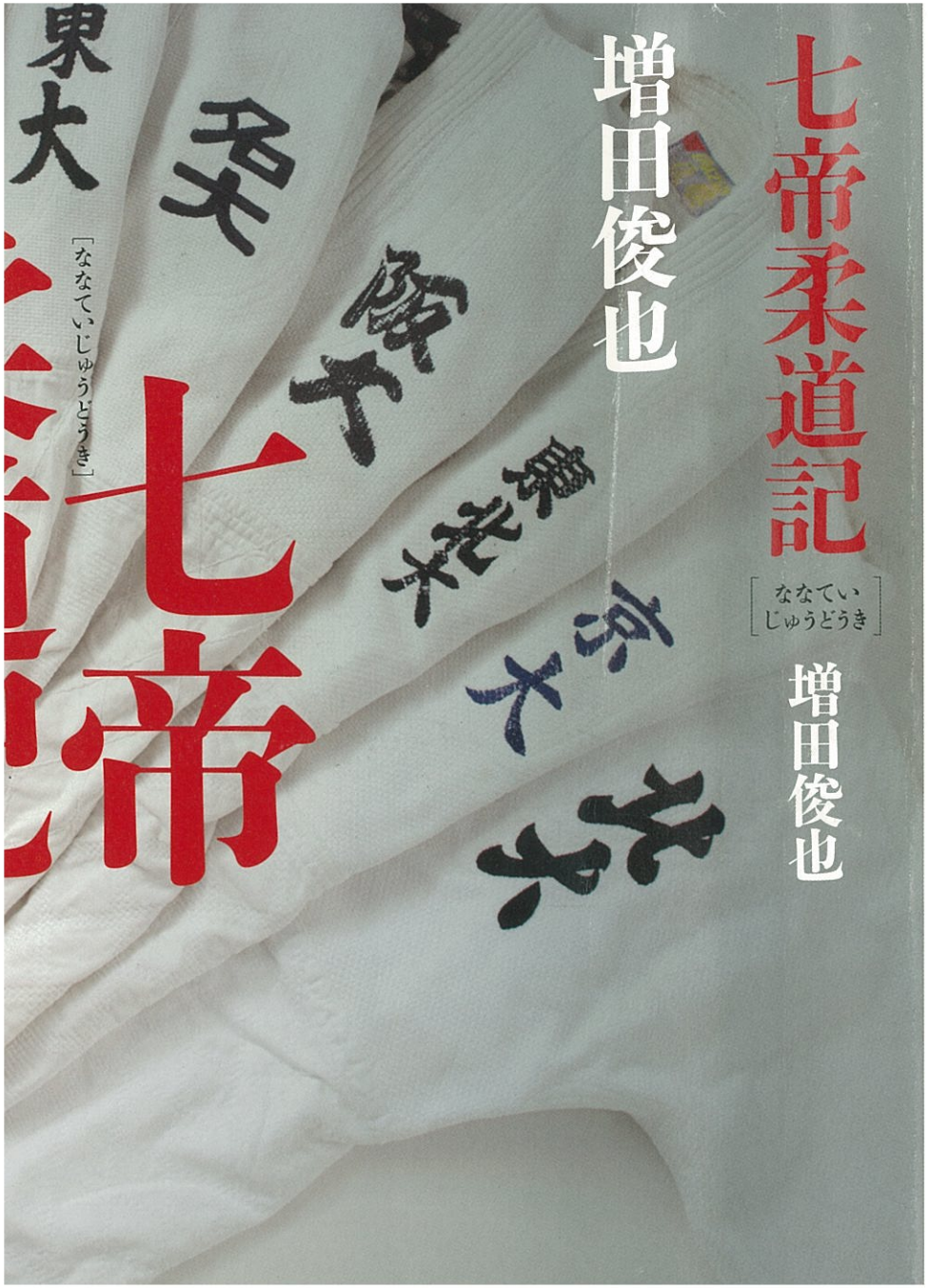
ただ一緒に泣くしかなかった。この世に神はいないのか……努力は報われないのか……。
岩井監督が立ち上がり、去年と同じように四年目一人ひとりにねぎらいの言葉を贈った。それが終わると仙台在住のOBたちが交代で挨拶を始めた。目を潤ませながら、私たち学生を励ましてくれた。自分たちの現役時代のことを重ねて話し、それぞれが一様に「練習は苦しいだろうけど絶対に辞めないでほしい。四年間やれば、引退するときに必ずこの言葉の意味がわかる」と繰り返した。力を込めてその言葉を繰り返した。
OBの話が終わると、和泉さんが次期幹部を発表した。思ったとおり主将は後藤さんだった。副主将に斉藤テツさん、専業主務に入院中の杉田さんが就いた。
後藤さんが立ち、こわばった顔で主将就任挨拶を始めた。その顔を四年目の先輩たちが涙で充血した眼でじっと見つめていた。
後藤さんが座ると、四年目の先輩たちが後藤さんと斉藤テツさんのところへ行って順にビールを注いでは何かを語りかけはじめた。後藤さんとテツさんは泣きながら肯き、それを飲み干した。
後藤さんとしばらく話し込んでいた和泉さんが、今度は私たち二年目のところにやってきて一人ずつビールを注いでくれた。
私にビールを注ぎながら和泉さんが言った。
「後藤たちを頼むで。三年目は少ないけ、あんたら二年目もしっかりサポートしちゃってくれや」
「……でも、北大は勝てるんでしょうか……ほんとに勝てる日が来るんでしょうか……」
「来る」

で北大の四年連続最下位が決まった。
取られた六人はすべて寝技で敗れていた。立技重視の東大に、寝技ばかり練習してきた北大が寝技で取られたのだ。言い訳のしようがなかった。七帝の頂点の高さがどこにあるのか、北大にはその尻尾すら見えなかった。

5

夜の慰労会には旧交会東北支部のOBがみんな来てくれた。人数は五、六人と少ないが仙台在住のOBは結束が固かった。昨年の京都での七帝戦には二人しか先輩が来てくれなかったのだ。浜田浩正さん、佐々木紀さん、金澤さん、斉藤トラさんの他、試合のときは見かけなかった上田さんや永田さんも来てくれた。OBたちがこれだけ来てくれたことだけが救いだった。
四年目の引退挨拶となった。
和泉さんが立ち上がった。
監督や同期への感謝を述べたあと「来年こそ……」と言って天を仰いだ。
そのまま黙って涙を流しはじめた。
天を仰ぎ、涙を拭おうともせず、静かに立っていた。
静かに静かに、涙を流し続けた。
横で見ていた松浦さんがいたたまれなくなったように立ち上がり、和泉さんの肩を抱いて座らせた。だが、挨拶しながら松浦さんも感極まって涙をこぼしはじめた。末岡さん、本間さん、上野さん、豊沢さん、内海さんと順に幹部が挨拶していった。みな咽び泣きだした。私たちもただ

ただ一緒に泣くしかなかった。この世に神はいないのか……努力は報われないのか……。
岩井監督が立ち上がり、去年と同じように四年目一人ひとりにねぎらいの言葉を贈った。それが終わると仙台在住のOBたちが交代で挨拶を始めた。目を潤ませながら、私たち学生を励ましてくれた。自分たちの現役時代のことを重ねて話し、それぞれが一様に「練習は苦しいだろうけど絶対に辞めないでほしい。四年間やれば、引退するときに必ずこの言葉の意味がわかる」と繰り返した。力を込めてその言葉を繰り返した。
OBの話が終わると、和泉さんが次期幹部を発表した。思ったとおり主将は後藤さんだった。副主将に斉藤テツさん、専業主務に入院中の杉田さんが就いた。
後藤さんが立ち、こわばった顔で主将就任挨拶を始めた。その顔を四年目の先輩たちが涙で充血した眼でじっと見つめていた。
後藤さんが座ると、四年目の先輩たちが後藤さんと斉藤テツさんのところへ行って順にビールを注いでは何かを語りかけはじめた。後藤さんとテツさんは泣きながら肯き、それを飲み干した。
後藤さんとしばらく話し込んでいた和泉さんが、今度は私たち二年目のところにやってきて一人ずつビールを注いでくれた。
私にビールを注ぎながら和泉さんが言った。
「後藤たちを頼むで。三年目は少ないけ、あんたら二年目もしっかりサポートしちゃってくれや」
「……でも、北大は勝てるんでしょうか……ほんとに勝てる日が来るんでしょうか……」
「来る」



9784041103425
1920093018005
ISBN978-4-04-110342-5
C0093 ¥1800E
定価：本体1800円（税別）
発行：角川書店

七帝柔道記

［ななていじゅうどうき］

寝技中心の七帝柔道に憧れて、北海道大学柔道部に二浪して入った主人公。
北大、東北大、東大、名大、京大、阪大、九大の七校で年に一度戦われる七帝戦、
そこは若者たちが己の尊厳をかけて肉体の限界に挑む崇高なる場所だった。
「このミステリーがすごい！」大賞出身の増田俊也が、
井上靖の自伝的小説『北の海』に捧げる金字塔。
大宅賞&新潮ドキュメント賞をダブル受賞したベストセラー
『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』を超える圧倒的筆致で、
青春小説の極北に挑む。